令和７年度　第２回北海道 Society5.0 推進会議　議事録

日時：令和７年７月８日（火）　9:30～11:30
場所：札幌三井 JP ビルディング（赤れんがテラス）
14 階　Akallabo

【北海道経済部ＡＩ・ＤＸ推進局　石川局長】
皆さん、おはようございます。それでは定刻となりましたので、ただいまから令和７年度第２回目の北海道 Society5.0 推進会議を開催いたします。本日、司会進行を担当させていただきます北海道経済部ＡＩ・ＤＸ推進局長の石川と申します。よろしくお願いいたします。
では、初めに主催者を代表いたしまして道庁次世代社会戦略監大矢から一言開会の挨拶をさせていただきます。

【北海道経済部　大矢次世代社会戦略監】
大矢でございます。ＷＥＢ会議ということで着座の方で御挨拶をさせていただきます。改めまして、本日は皆様御出席いただきましてありがとうございます。川村座長をはじめ、皆様には北海道 Society5.0 構想の実現に向けた取組に御尽力いただいていること厚くお礼申し上げます。
前回ですが、第１回推進会議を６月に開催しました。その際は佐々木委員と小松川委員から実際の具体の事例を紹介いただいたところでして、我々事務局から、今年は現行の推進計画が最終年で、次期計画の御議論を今年お願いしたいと、現在の計画の進捗状況を御報告させていただいたところです。これから次期計画の議論を皆様方にしていただきたいと思っていますが、後ほど少し我々の考え方をお話しますが、我々の中では、今回組織の中でＡＩ・ＤＸ推進局を作ったように、国も６月４日にＡＩ新法ができまして政府としても今年の冬には、基本方針を作ると言っていますので、ＡＩの活用みたいなものはこの計画検討の中で、一つなのかなと思っています。ちょうど昨日札幌市、川村先生が最高師範になっていますＡＩ道場の開講式ということで私共も参加させていただいたのですが、昨年度末の報告会には 300 名を超える方が集まったということで、浸透してきたというか、皆の中ですごくＡＩが身近になってきた証左ではないかなと思っています。そういったことも含めまして、次の計画では５年前とは違う動きを反映していかなければいけないと思っていますので、今回がまさに実質的な議論の始まりですので、次期 Society5.0 推進計画の策定に向けまして、皆様方から様々な御意見をいただき、我々としてきちんと取りまとめてまいりたいと思っていますので、よろしくお願いします。私から簡単ではございますが、御挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【北海道経済部ＡＩ・ＤＸ推進局　石川局長】

それでは本日の委員の皆様の出席状況ですが、出席者名簿に記載のとおり会場参加６名となっております。また、オブザーバーの皆様は全てＷＥＢ参加となっております。前回同様、会場で参加されている委員の方は、テーブルに配置しておりますファイルに現行の北海道 Society5.0 推進計画等の参考資料を綴っておりますので、適宜、御参照ください。なお、このファイルは会議終了後、回収させていただきますので、よろしくお願いします。

それでは、以降の議事進行につきましては川村座長にお願いいたします。

【川村座長】

皆さんおはようございます。お忙しい中、そしてすごく暑い中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。先ほど御説明もありましたけれども、北海道 Society5.0 推進計画策定の推進会議になるわけですけれども、今年度５回計画されておりまして今回 2 回目ということで、この後に具体的な計画の策定に入っていくということで、もちろん、原案ができてからいろいろ御意見いただいてもいいのですけれども、今言っていただくと、早いうちからそれを計画に反映させることができるということで、是非、いろいろ忌憚のなき御意見をいただければと思っております。

それでは早速ですが、議事の次第に従って進めたいと思います。

初めに議事の (1)、本日の会議について事務局から御説明をよろしくお願いいたします。

議事１　本日の会議について

【北海道経済部ＡＩ・ＤＸ推進局ＤＸ推進課　山田補佐】

事務局のＤＸ推進課の山田と申します。資料１を御覧いただければと思います。

本日の議事の内容につきましては、主に１点となっていまして、次第にもありますとおり、次期北海道 Society5.0 推進計画策定の方向性について、事務局の方から御説明させていただき、その後意見交換を行っていただく流れとなっております。

なお、本会議につきましてはオンラインと併用で行う会議となっておりますので、会場で参加していただいています委員の皆様につきましてはハンドマイクを使用して御発言いただき、Ｗｅｂ参加のオブザーバーの皆様につきましては、発言時にミュートを解除してから発言していただくようにお願いします。オブザーバーの皆様につきましては発言を希望される場合は、ＺＯＯＭの画面下にあるリアクションから、手を挙げるボタンを選択していただきますと、座長から指名させていただく流れとなりますのでよろしくお願いします。また、事務局への連絡事項などありましたら随時チャットの方に書き込んでいただければと思いますのでよろしくお願いします。

以上で説明を終了いたします。

【川村座長】

続いては議事の (2) 次期北海道 Society5.0 推進計画策定の方向性(案)について、事務局

から説明をよろしくお願いいたします。

議事２　次期「北海道 Society5.0 推進計画」策定の方向性（案）について

【北海道経済部ＡＩ・ＤＸ推進局ＤＸ推進課　村田課長】

ＤＸ推進課の村田でございます。私から御説明いたします。資料２を御覧ください。

表紙をめくった２ページでございますが、今年度から御就任いただいた委員の方もいらっしゃいますので、まずは、現行計画の概要について、確認したいと思います。本計画は、令和元年度末の令和２年３月に、本推進会議の前身である「北海道 Society5.0 懇談会」から御提言をいただいた「北海道 Society5.0 構想」に掲げます「北海道 Society5.0」の実現に向けた北海道全体の指針として、令和３年３月に策定したものでございます。また、道の総合計画には、この計画を含め、下位の計画として 100 件ほどの分野別計画がございますが、このうち、直面する重要課題について、重点的・分野横断的に政策を推進するための計画であります４つの「重点戦略計画」の一つとして位置づけられている、重要な計画でございます。また、本計画は、「官民データ活用推進基本法」の規定に基づきまして、都道府県では必ず策定しなければならない「都道府県官民データ活用推進計画」という性格も持たせているものでございます。この官民データ活用推進計画については、後ほど、改めて御説明します。また、「計画期間」は「令和３年度から令和７年度までの５年間」となっております。

３ページに、計画のポンチ絵がございますが、ここで御確認いただきたいのは、下段の取組方針の欄でございます。「(1)暮らし」、「(2)産業」、「(3)行政」の３つの分野に、横断的視点である「(4)データの利活用」と、それらを支える「(5)基盤整備」を加えた５つを、「施策の柱」として取組を推進するとなっております。

次のページには、「北海道 Society5.0」の「概念図」を添付しております。

中段に雨雲がございまして、これが、北海道が抱えている課題を示しており、それが雨となって地面に降り注ぎ、それを糧として基盤が肥えて、栄養分であるデータが「暮らし」「産業」「行政」という木の幹を大きく太くしていくという５つの政策の柱を表現しています。さらに、右上の太陽ですが、未来技術の明るい光がさらに木を大きく成長させ、雨雲が晴れ、虹がかかり、左側にある 2021 年から 2025 年、ひいては 2030 頃の北海道の未来社会にまでアーチが架かっていくということを示してございます。ここまでが、現行計画の概要に係る御説明でございます。

次に、現行計画の取組について、振り返りたいと思います。５ページから６ページにかけまして、５つの施策の柱ごとに「主な取組」「指標の状況」「(振り返りの) コメント」を記載しており、「主な取組」は、各分野とも、指標に関係の深い主なものを２つから３つ、記載しております。指標の状況につきましては、前回会議で指標ごとの状況に係る資料を配付しましたので、今回は集計した数しか記載してございませんが、指標の状況から、「(1)暮らし」や「(2)産業」では、デジタル技術の実装に向けた取組が着実に進展しているものの、

「(3)行政」では、マイナンバーカードの普及率が目標値に達しない見込みであり、道民の利便性向上と行政の効率化に向けて、マイナンバーカードの普及など、デジタル化を前提とした仕組みづくりに向けた更なる取組が必要と整理しました。また、「(4)データの利活用」では、オープンデータ化に取り組む市町村数は増加しましたが、前回推進会議におきまして「データの内容が」といった御発言もございましたので、今後は、データの量・質の向上に取り組んでいく必要があると整理をしてございます。「(5)基盤整備」では、指標の状況や、これまでの推進会議での人材育成に関する御発言も踏まえ、人材の確保・育成の取組を加速させる必要があると整理しております。

また、次期計画の策定に当たっては、現行計画の振り返りに加え、この間の経済・社会情勢の変化についても踏まえる必要があると思いますので、それを７ページにまとめております。計画に関係する変化としては、資料記載の「ＡＩの急速な進展」や「不安定な国際情勢を背景としました経済安全保障強化への要請」、「脱炭素化に向けた動きの加速化と、それに資するデジタル技術への要請の強まり」といった３点が大きなものと考えています。

以上などを踏まえまして、事務局として、次期計画策定の基本的考え方をまとめた資料が８ページからでございます。まず基本的な考え方①でございますが、現在の計画が、構想が示した概ね 10 年後の未来社会の実現に向けた前半５年間の計画でございましたので、次期計画は、後半５年間の計画として策定することとし、今後、本推進会議の皆様のご意見を伺いながら、資料記載の３つの視点を基に、検討を行いたいと考えております。視点の一つ目は、現行計画との連続性に鑑みまして、引き続き、暮らし、産業、行政、データ利活用、基盤整備の５つの「施策の柱」を掲げた上で、この間の経済・社会情勢の変化を踏まえた３つのテーマに沿った施策などを盛り込んでいきたいと考えております。資料記載の３つのテーマは、前のページで御説明しました項目に対応するもので、豊富な再生可能エネルギーの存在など、本道の果たす役割に対して高まっている期待に応えていこうとするものでございます。

視点の二つ目は、成果指標、KPI の設定に関するものですが、以前、本推進会議で「取組の効果が見えにくいものは避けるべき」という御意見を頂いた経過もございますので、目指す最終目標と関連性が高いものとすること。下の※印にございますが、現行計画では、30 ある指標のうち、21 は数値目標のある定量的指標となっておりますが、９つが定性的な指標となっておりますので、これを、次期計画では、原則として定量的なものとすること。また、一つの分野に複数の指標を設定することといった点に留意したいと考えております。

視点の三つ目は、本推進会議に設置していました２つのワーキンググループにおいて、今後、特に重要とされた取組について必要な施策を盛り込むこととしたいと考えております。主なものとしましては、データを活用したサービスの充実、これは、公開されたデータの活用された事例を増やして見せていくことで、さらにオープンデータ化が進むことを念頭に置いたものでございます。また、ＡＩの活用、これは機運醸成や人材の育成なども含めて考えております。そして関係者を巻き込みＤＸを推進できる人材、地域のリーダー的な人材の

育成・確保といったことを考えております。

このほか、次のページでございますが、基本的な考え方の②としまして、前回推進会議で、青森県などの計画を御覧いただきましたが、あのように、要点を視覚化・可視化した道民が理解しやすい形で作成したいと考えております。イメージは、さし絵を入れておりますとおり、文章の多いＡ４縦版から、よりグラフや図を多く差し込み、文字を減らしたＡ４横版とし、道民が見てみようかなと思うような作りにしたいと考えております。

また、③として、現行計画同様、官民データ活用推進基本法に基づく、都道府県官民データ活用推進計画としての位置づけも持たせることとし、法で定める事項を盛り込むこととしたいと考えております。具体的には、※印で記載している「オンライン化原則」「オープンデータの推進」「マイナンバーカードの普及・活用」などの５つの取組に関する方針を記載するということになります。12 ページを御覧ください。

説明の最後になりますが、今後の想定スケジュールでございます。表の中段を御覧いただき、本日が７月８日の第２回推進会議でございますが、８月下旬の第３回推進会議で骨子案について、10 月中旬の第４回推進会議で原案について、それぞれ御議論・御検討をいただき、来年１月下旬の第５回推進会議において、パブリックコメントなどを経まして作成した計画の案について御議論をいただき、年度内の策定・公表と進めたいと考えております。

なお、８月下旬の第３回推進会議で「計画の骨子案」を御議論いただくに当たりまして、数日前に資料を配付して、当日に御意見をお願いするだけでは、十分な時間が取れず、皆様の御意見を十分に反映することができないのではないかと考えておりまして、今月下旬を目途に、委員の皆様へ、骨子案のたたき台や関係資料を送付させていただきたいと考えております。その上で、８月上旬までにあらかじめ御意見をいただき、その意見を盛り込んだ骨子案に対して、８月下旬の第３回推進会議で、改めて御意見を伺いながら議論いただきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

【川村座長】

ただいまの事務局からの説明について御質問等含め、意見交換に移りたいと思います。

本日、オンライン参加の委員の方はいないので、基本的に名簿順でいきますがよろしいでしょうか。それでは、名簿順に従いまして、最初に小松川委員の方から御意見をお願いします。

【小松川委員】

事務局の進め方は、大変丁寧に進められている印象を持っています。全体的には、そのような印象で、次回の推進会議までに、ある程度、今日の話をベースにして、我々の方にフィードバックをしながら進めるのは、すごく丁寧なやり方かなと思っています。

それで、私の方は、相変わらずですけれども、人材育成というところで中心的に議論させていただいて、今回の計画の中でも、特にその先導的に、ＡＩとかＤＸを引っ張っていく、

そういった人材育成は、おそらく、ＡＩの活用の中で育てられていく雰囲気でしょうし、もうちょっと裾野の広い形での、確かワーキングで議論していた中長期的な人材育成というのか、それは裾野の広い北海道全域で、全体として底上げしていく部分は、ここの関係者を巻き込み、ＤＸ推進できる人材の育成・確保、こういう形で検討結果を入れながら、次に向けたたき台が作られていく方向性かなと認識していますので、今までの議論も踏まえた上での、提案のベースができているということで、話を丁寧に、ここまで進められているという印象を持っています。以上です。

【川村座長】
貴重な御意見ありがとうございました。続きまして和田委員、御意見がありましたらよろしくお願いします。

【和田委員】
まず、スケジュールにあるパブコメに加えて、子どもの意見があるのがすごくいいと思いました。これからを支えていってくれる人材のための社会を作っていくので、そういった取組みは非常にいいなと思っているところです。
それから専門でないところはお話ができないのですけれども、私の専門で言うと一次産業ですが、基本的な考え方の８ページ、３つ目のところにある、脱炭素化というキーワードは、これから具体となっていくと思っているところです。いろいろ取組がこれまで進んできている中でもやはりわからないことだらけというのが、まだ現実なところで、皆様、函館でいかの初競りが出来なかったという話も聞いたと思いますけれども、そういったところで、どんどんとＡＩを活用していきながら，効率上げていくことが脱炭素化に繋がるのかなと思っています。
機械的な改革とか、仮にいいものができたとしても画期的な数値の改善はないでしょうし、またそれを導入するに当たってもコストがかかりますので、やはりデータをうまく活用しながら効率上げていくことが、すごく大切かなと思いますので、そういったことが、もし次期の策定の中で、方向性が合うのであれば、組み込んでいけたらいいのかなと思って聞いておりました。ありがとうございます。

【川村座長】
貴重な御意見ありがとうございました。続きましては入澤委員、お願いします。

【入澤委員】
北海道ＩＴ推進協会入澤です。
前回の計画の策定にも携わって、５年経って振り返ると、なんかいろいろ感慨深いなと思いますが、改めて、この７ページ目の年表を見たときに、この５年間本当いろいろなことが

あったとすごく感じています。中でもやはりこのテクノロジーの世界でいうと、ChatGPT が公開されて、生成ＡＩが出てから、急速にＡＩの世界感が広がっているのは、策定当時にはなかった１つの大きなことと思います。ですから、次の計画には、やはりここのＡＩの活用がやっぱ中心になってくるだろうと、１つ考えています。一方で、これ道庁の計画に入れるのがふさわしいかどうかわからないのですが、テクノロジーの進化とともに、犯罪が高度化している社会的な課題がありまして、ＳＮＳを使った詐欺事件ですとか、いろんな高度なものが増えている。これも、生活を守るという観点からも、こういうものに対する道民一人一人のリテラシーの向上みたいなものも、テクノロジーと一緒に、生きていく時代になったときには、必要なことかなと思います。

あと人材育成。この５年間振り返ると、そこまで増えたかどうかがちょっとわからない、一方でここに無いけど、リスキリングという言葉が、昨今ありまして、それに対する補助金とかもいっぱい出ていたりしますので、そういうリスキリングなんかでＩＴ人材を作っていくみたいな考え方も、１つあってもいいと思っているところです。

最後に今後の５年間のテーマでいくと、おそらく、ロボティクス分野がすごく進化するだろうと個人的には思っています。やはりＮＶＩＤＩＡの開発環境において、ロボットの脳の部分はＮＶＩＤＩＡがおそらく制してくるだろうと言われていますので、今生成ＡＩの方で、いろんなＮＶＩＤＩＡのＣＵＤＡの開発環境とかチップの性能とかいろいろありますけど、やはり、このロボットの分野に関しても、まだまだそこの覇権は多分譲らないと個人的には見ていますので、その辺を何か開発できるとか、北海道で、ヒューマノイドロボティックスというか本当に人型ロボットみたいな、テスラなんかはオプティマスみたいのを作っていますけれども、ああいう世界感を、道の中で、一次産業ですとか、本当に労働力不足に陥っているところに対して、提供できるようなところも、強化というか、これは大学と一緒になって何かできたらいいのかと思っています。

【川村座長】

続きましては西野委員よろしくお願いします。

【西野委員】

富良野市の西野です。次期計画に向けて、これまでの５年間をきちっと総括、振り返って、そして次に向かっていくことは、よろしいのかなと思います。そうした中では、これまでの振り返りの中でも、暮らしとか産業という部分は、着実に進んでいるという振り返りのコメントがあったところですけども、一方で、これまでのこの会議の中でも前回ありましたけれども、実は企業の中でも、やっているところとやってないところが、どんどん格差が広がっているというコメントがあったり、また、そもそも Society5.0 の目的が、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させた新しい社会の実現を目指すとか、前回川村座長さんの方からも、経済発展と社会的課題を解決する人間中心の社会を目指していくと。それに対し

て、どう評価をしていくのか、そのようなコメントもあったと認識していますけれども、人間中心の社会に、この５年間になったのか非常に難しい部分ですけれども、そういう中で、今後の例えば１つの指標としては、前回もお話させていただきましたけれども、デジタル庁で出しているウェルビーイング指標、地域幸福度、これは客観的指標だとか、主観的指標も織り交ぜた仕様ですので、こういったことも１つのＫＰＩといいますか、指標として設けることで、本当にこのSociety5.0にどう向かっているかという、１つの参考にもなるのかなと、意見を述べさせていただきたいと思います。以上です。

【川村座長】
　では、最後、乗木委員よろしくお願いします。

【乗木委員】
　当別町乗木です。方向性ということでお話がありました、全体としていくと、よろしいのかなと思っております。要は５年間の中で何がどう変わっていったのか、いろいろ振り返りのコメントはあったものの、実際に、例えば、今５年間の中の整理をしたときに、この先10年後にどうなっているかということに対して、どのぐらいの進み具合をしているのかというのは、改めて確認したほうがいいのかなという思いがします。
　それと指標の捉え方ですけど、今のお話と変わりますけれども、最終的な目標と関連が高いもの、今そのことをやったことでこういう結果が出るというよりは、最終的に全部がトータルしてこういう結果に結びつくであろうという目標が立ってくると、おそらく皆さんに公表したときに、その話が一般の人がイメージしやすい、という内容に近づいていくのかなと。それが絵になって出てくる、見やすいビジュアル的な整理がされてくると、計画、読み物としては見やすくなるのかなという思いがして聞いておりました。
　ただ、やっぱり１点だけ気になるのが、いろいろＡＩの分野ですとか、先日ちょっと、川村先生のエッセイを読ませていただきましたけども、わかる人とわからない人との格差が広がると思っています。機械ができることは機械を任せましょう、人が考えるところ、そこの能力をもっと高めましょうというお話が、すごい印象的だったのですけども、そういった、今お話あったような、川村先生の書かれているエッセイのような話をきちんと皆さん理解できる社会にならないと、おそらくＡＩの活用が進まないというところがあって、技術の進歩もさることながら、これは多分、人材育成の文脈になると思うのですが、そういった物事の構造、仕組みというのか、そういうのを正しく理解できるようなものに、この計画が繋がっていくといいと、感想になりますけども思いました。以上です。

【川村座長】
　それでは、オブザーバーの方々から何か御意見ある方っていらっしゃいますか。
　皆様方から貴重な御意見いただきました。それも踏まえて私の方でもコメントを述べさ

せていきたいと思います。

これまず Society5.0、誰のものかを考えたときに、未来に向けて、特に若い人たちとか子供たちのために、今何ができるのかが、基本的な、大事にすべきことと思っています。世の中どうしてもシルバーデモクラシーとかって言い方にもなっちゃったりして、なかなか若い人の意見がマイノリティになることもあるけれども、やっぱり、ネーミングからしても、未来に向けた推進計画なので若い人たちとか子供たちに向けて、世の中がよくなるような基本方針を掲げた上で考えたいと思いました。

それから、４枚目のところで、これ前回の計画からのわかりやすい概念図だと思うんですけども、これで十分か、不十分なことないかと考えた時に、先ほど入澤委員のコメントにもありましたけど、サイバーセキュリティの高度化も、この雲・雨になっていくのかなとか、あとは、私も専門じゃないのでどれぐらい気にすべきかあれですが、今、高度成長の時に作られたインフラの老朽化が、日本全国で問題になってきているので、そういうインフラをどうやって手間とか予算とかをかけられない中で、アップデートしていくのかということもやっぱり雨になるところだし、そこのところにＡＩとかＤＸを活用することも、すごく大事なんじゃないかと思いました。その辺りが、多分、５年、この計画の中で５年経って今後５年で新しく出てくる、外的要因だったり脅威だったりとなるのかなと思います。

それから、７枚目、これも先ほど入澤委員もコメントしていますが、テクノロジーが変わって、変化が早いと、ChatGPT 出てきてまだ２年半ちょっとです。５年の間に、ChatGPT がない時期に、いろんな計画を考えて、途中で ChatGPT が出てきて状況がすごい変わってきたというぐらい世の中の進歩は早いものになっています。

ここから先、私もやっぱヒューマノイドが、ものすごく世界を変える、次の技術になっていくと思っています。技術自体は日本でも、ホンダのアシモとかいろいろありましたが、あれが世界を変えたかというと多分、デモンストレーションに使われた程度の技術でしかなかったけれども、このタイミングでいくと、１つは大規模言語モデルＡＩでロボットが頭脳を持てると、人の、普通に言葉の指示を理解しながら動くことが現実的になってきているということと、いいかどうか悪いか別にして、テスラのヒューマノイドもそうですけども、中華製で今ものすごくヒューマノイドの開発が進んでいると。思い返してみるとドローンが同じような進歩普及を遂げたけれども、今、手に入る高度なドローン、ほとんど中華製とか、ＤＪＩとかになっている。これヒューマノイドでも同じようなことが起こり得るのかなと思っています。

人手不足になるとどうしてもロボットの手でも借りたいとなる、その時に、安価で大量に手に入れられるものが中華製となると、さっきのサイバーセキュリティの話に結びついてきますけれども、そこら中に中華ロボットがいろんな手伝いをしてくれる状況になったときに、例えば何かスイッチ１つで、それが、突然こう反乱を起こすみたいなＳＦめいた未来も本当にないとも言えないわけです。ファーウェイのいろんなネットの通信機器なんかにも、謎のチップがとかが入っていたという話もあったりします。

そういうことも踏まえながら、かといってロボット使わなきゃいけない、ロボットの手も借りなきゃいけない状況が少なくても、５年間から 10 年以内にはやってくると思うので、そういうところにどう考えるかも、今のうちから、少し議論しておく、そんなことも少し頭に入れながら、今回の計画というのは、少し想定して考える必要があるのかなと思いました。

それから９枚目のＫＰＩの話、これ確か、前回、青森ですか、すごくわかりやすく作られていて、参考にするのはすごくいいと前回の委員会のお話も聞いておりました。これＫＰＩですけれども、すごく大事だと思う。乗木委員が言われた、これまで、どこまできたかということと、この先どこまで行くのかということを、わかりやすく示す指標としてはＫＰＩがすごく大事なはずで、今回、次期計画を考えるに当たって、よく考えたＫＰＩにして欲しいなと思っています。この手の計画立てるときに、ＫＰＩ、設定されることが多いですが、見ていると、すでにカウントしているものを、ここに持ってきてＫＰＩですというケースがすごく多い気がする。それは確かに、数値として表すのは、今カウントしているものを持ってくるのは簡単だけれども、もう本当にこれ道しるべになるはずで、本当は今カウントしているから持ってくるという発想じゃなくて、行くべき道を、座標として、正確にこう、表すものは何かを考えた上で、たまたま今とっている数字が使えるのであればいいけれども、という発想でＫＰＩ作って欲しいと。

これ、例として出すのがいいかどうかわからないのですが、とある道の委員会で、スポーツ振興を測るのにオリンピックのメダル数を指標、ＫＰＩに持ってくることをされていて、確かに総合力としての総合結果としてはそうかもしれないが、オリンピックメダル取れるかどうか、選手の個人的な頑張りとか、たまたまそういう良い選手が出てきたとか偶発的要素が強いので、増やそうと思って増やせるのだったら簡単な話だけど、増やせないと思う。

一方で、例えば運動施設の数とか、市民の中でスポーツをやっている人の割合とか、直接的に働きかけて直接的に増やせるものだから、ダイレクトにやって増やす施策と、結果がダイレクトに結びつくから、そこを増やすのは簡単だけど、オリンピックのメダル数、風が吹けば桶屋が儲かる的なぐらい因果関係でいくと相当遠いところを、目標にＫＰＩにするのは、そこを見て、今回良かった悪かったみたいな反省は難しいと思う。そういう意味で、企業でいうとバランス・スコアカードというのかな。例えば、企業の業績を測るために、利益とか、売り上げとか目標にする、でもそれって結果なので、今日できることを何を増やすみたいな因果関係を積み上げて最終ゴールに至るために、自分が今日何したらいいのか明確化されると。そうすると多分ＫＰＩ、幾つか抽象度の違うものがきちんとあって、今日、何かすれば、増やせるもの・改善できるものとそれが達成されてこっちが達成されてその結果こっちがよくなるものみたいなこと、きちんと整理した上で、ＫＰＩを立てないと、何か結果数字で測るんだけれども、その数字を良くすることが本気の目標になっているのか。何か取ってつけた感じになっているのかが、すごくあるなと、いろんなところ、これどこというわけじゃなく、いろんなところでそういうことってあると思うので、ぜひこのＫＰＩをいろいろ目安として立てるときには慎重に確かにこの数字が良くなることは、この推進計画が、

全体として、浸透して世の中良くしてくことに結びついているということが端的にわかるような形にして欲しいと思いました。

それから10ページの人材育成のところ、すごい大事だと思うし、いろんなワークショップとか、講演会みたいなものとかもこれまでもされてきたと思うし、これからも重要だと思うけれども、この人材育成はすごく難しいところも含むなぁと最近感じています。ＤＸとかＡＩとか私もいろんなところで、いろんなお話させていただきますし、いろんなところで、ＡＩ人材増やしたいということをお聞きするんですが、こないだ、とあるＩＴベンダーで話していても、なかなかみんなＡＩ活用してくれないと、エンジニアの方の活用が進まないという。例えば、いろんなＩＴのエンジニアだったら感度が高い気がするんだけれども、それなかなか使うに至らないって言ってベンダーが悩んでいる。なんでかと思ったんですけれども、考えてみると当たり前の気がする。

なぜかというと、昨日までやっていた仕事を、今日も同じようにやったら給料もらえるし明日も同じようにやったら多分給料がもらえると、その中で使ったことないＡＩを、自分で学んでそれで仕事のやり方変えるってすごいパワーがいるし、それによって自分の仕事が生産性倍になって、半分の時間でできた、例えばそれが達成できたら、余った時間遊んでいいっていうんだったらみんなやると思うんですけど、余った時間にさらに仕事が入ってくると。こう考えると、本当はデジタルに感度が高い、エンジニアの方でも、それを率先してやるメリット何なのかなと考えると、それを個人のやる気でやってください、といったことを期待するというのは難しいのではないかなと思いました。それで、何か一部の新しいもの好きの人が頑張ってやって、それで、「あなたが、どんどん引っ張ってください」、「あなたのやる気に期待しています」のようなことを言っても、やはりＡＩやＤＸの活用というのは進まないのではないかと考えると、単に、教えるだけでもやはりだめで、大事なのは、そういうことを率先してやった人には、きちんと個人的なインセンティブやメリットがあるということ。生産性が倍になったら、給料も倍で払っても良いはず。倍までは払わなくてもいいかもしれないですけど、そういうことを率先してやった人は、きちんとリスペクトされるし、そういう人たちが、きちんとインセンティブをもって、それに取り組むことによって、個人的にも、良いことがきちんとあるような、それとセットでないと、やはり、新しい技術の導入は進まないなと思います。そういうことで、この計画の中では、インセンティブをどうつけるかという話ではなくて、ＡＩを活用しなければいけない社会の側が、そういうことを一生懸命、新しくやる人というのは、きちんとリスペクトされるし、そういう人が、色々なことを改善していって、生産性が上がるのであれば、そういう人たちが、きちんとそれに報いた報酬なり、何なりということが、設定されるということを、当たり前にしていかないと、ＡＩの活用は進まないよなと最近感じています。これもおそらく色々な視点もありますし、委員の皆様からいただいた御意見というのも、ぜひ反映していただいて、次期Society5.0推進計画を良いものにしていただきたいと思います。

一方で、テクノロジーも、ものすごい速さで進歩しているので、５年前に、この場で計画

して５年後を考えた時に、その途中でChatGPTが登場することを想定できなかったように、同じような様々なテクノロジーが出てくるので、決して、ここで作ったものが、固定されて、これを５年間そのまま行くのだということではなくて、途中で変えるということを、大前提として作らないと、このSociety5.0というような、テクノロジーを使って社会を変えていこうというような計画は、遂行できないのかなと思いますので、途中の見直しというのも、当然、計画に入れた、大前提を持ちながら、まとめていただきたいかなと思いました。少し長くコメントしましたが、是非、委員の皆様方のご意見をまとめながら進めていただきたく思います。

改めて、もう少し発言されたい委員の方はいらっしゃいますでしょうか。大体、よろしいでしょうか。

【北海道経済部　大矢次世代社会戦略監】

まだ時間もありますので、皆様から、もう少しいただいた方が、我々にとっては、素案を作成する前に、色々とヒントをいただいておくことが大事なものですから。

【川村座長】

今日の議題は、ここまでですので、何かございましたら、是非、御発言ください。

【入澤委員】

先ほどから、現行計画の用語集の辺りを見ていて、「この時には、この用語は、まだなかったのだな」とか、おそらく、これからの用語集には、先ほど私が言ったような言葉がいくつか入ってくるだろうなという感じで、端的に捉えるとそういうことかな、というのと、もう、これは仕方がないのかもしれないですけれども、現行の計画を作ったときのメンバーを見ると、今となっては僕と川村先生だけでしょうか。山本先生が座長で。この時の道庁さん側の方々も、皆さん代わってしまっている。道庁の中で、その時の人を誰か連れて来ることはできないものでしょうか。あの時、中山さんとかがメインでやっていたと思うのですが、彼は、今どういう思いなのかなという、御意見をすごく聞いてみたいなと。彼とは、すごく本当に色々と喋りながら、計画を作っていったので、当時は、非常に良い計画ができたな、と思ったものですけれども。

【北海道経済部　大矢次世代社会戦略監】

この場に連れてくるかどうかは別として、本人から聞き取りすることはできます。

【入澤委員】

その時にどういう考えで、今振り返ってみるとこうだったから、今度はこうした方が良いといった、割と、役所の中での意見もすごく貴重かなと思います。

【北海道経済部　大矢次世代社会戦略監】

そういう意味では、総務省に戻った榎さんは、今もお付き合いをさせてもらっているので、榎さんのような方が、どのように思っているのかは、すごく参考になるのではないかと思います。国では、放送行政のようなところに携わっておられますので、国の立場から見た、この５年間の北海道は、どうだったのかという御意見は、すごく面白いと思います。

【入澤委員】

あとは、その当時思っていたファンタジーといいますか、例えば、５Ｇは、何か世の中を変えるみたいな感じでしたが、全く変わってないので、４Ｇと何が違うのだろう、といったことがある。結局、そういう、幻想というか、色々あったなあ、なんていうのは結構思うところです。

また、ブロードバンドは、これちょうど計画策定の最中だったところもあって、非常に良かったのかなという気はしますけれど。

ほかには、一次産業は、和田先生がやはり詳しいと思うので、５年前と今とでは、一次産業で何か違いなどはあったりするのでしょうか。

【和田委員】

一次産業でも、そのような状況になっています。ますます、気候変動等の影響もあるとは思うのですが、やはり、なかなか読めないというか、わからないことだらけだなというのが、やればやるほど、非常に、最近痛感しているところがあります。

それで、国の動きも見ているのですが、特に、水産業に関しては、なかなかうまくデータの利活用だとか、ＡＩの活用がうまく進んでいるような状況は、あまり見えてきていないところがありまして、個人的にはＤＸに興味があって、少しくだらない話なのですけれども、評価してみると、函館のイカ釣りで、イカを１杯釣るために使う燃料は、ペットボトル 500 ml と同じ量になります。一方で、定置網だと、ヤクルト１本分（65ml）の燃料で 8 杯捕れます。このような差が出てくると、ＧＸに向けた基本方針が２年ほど前に国から出ていますけれども、消費者の行動変容という言葉が中に書かれていて、おそらく、この後、新しい計画を作るときは、我々、産業の立場にいながらも、消費者も変わってくることを前提に、考えていかなければいけないのかなと最近思っているところです。そういったことを考えると、北海道の一次産業は農産物だったり、水産物だったりするのですが、これは、きちんと、カーボンニュートラルを意識した取組ですということをアピールしていくのも、一つ付加価値になるのかなと思っていますので、その辺りを、うまくＡＩを活用しながらやっていけたらなと、最近思っているところでした。

【川村座長】

和田先生と議論したかったのですが、北海道では、やはり、農林水産、また観光という産業が、すごく中心にあって、特徴的だと思うのですよね。それで、今、ＡＩが、若しくは、ＤＸでもいいのですが、まあ、そういうところで世界的な課題というのは、世界全体に対して、そういう解決策やソリューションなりができて、ばらまかれるということで、解決していくことはあると思うのですけれども、やはり、北海道の課題は、北海道で解決していかなければいけないと、そのときに、例えば、一次産業で、ＡＩを使いましょうと。わかりやすくて、よく例に出てくるのは、例えば、野菜の仕分けみたいなものを、一生懸命に人がやっていたのでは大変だから、ＡＩの画像認識でそれを仕分けましょう、といった、その手の例というのはよく出てくると思うのです。なので、それは確かにわかりやすいＡＩ・ＤＸ化の方向性なのだけれども、開発して、何にどれだけ効果があるのかなということをイメージすると、作業従事者１人を置き換えられると、もちろん、その作業従事者が 100 人いたら 100 人分かもしれないけれども、それは、要は、経済効果として、どれくらい意味があるかというと、人手が足りなくて大変。だから、それをＡＩに置き換えしましょう、という発想は、市場全体を広げるわけではなく、後ろ向きなＡＩ化だと思うのです。

一方で、例えば、ＡＩがあるから、その仕分けを例にとっても、これまで人の目では見分けられなかった品質の違いが、ＡＩによって明らかになって、今まで全部 A 級品としていたものの中に、実は、S 級品があって、ＡＩを使うことによって、そのＳ級品を見分けることができて、S 級品が、例えば、100 倍の価格を付けても売れる価値があると。これは、ＡＩを入れることによって、作業従事者 1 人が置き換えられたわけではなくて、ＡＩを入れることによって、それまでになかった価値が生まれるということじゃないですか。おそらく、水産業の中でも、そういうことは、たくさんあるのではと思うのです。そういう意味で、北海道の中で、一次産業を含めて、ＡＩなどを使って改善していきましょうという話はあるのだけど、できればそれによって、何か、高付加価値のものが、もっと生まれて、何なら、それを海外に高く売るというような、マーケットを広げるような、そういうＡＩやＤＸの使い方の方を、もっと一生懸命やるべきなのではないかなと考えます。で、それ以外はまあ、人が足りなくなっているのは仕方がなく、人がいないから、ＡＩを入れるというのは、それは、もちろん、ありますが、何かその両輪で、北海道の一次産業のＡＩ・ＤＸの計画を考えていかなければいけないのではないかと最近思うのですけども、まあ、その辺りで、何か具体的な例や、色々取り組まれているところがあるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

【和田委員】

まさに、川村先生のおっしゃることにもアグリーなのですけれども、具体的な例となると、まだ、なかなか見当たらない気がします。

そのＡＩを使ってというよりは、付加価値を付ける努力は、色々なところで取組があるのですけれども、そのための機材を導入するということでありますが、まだＡＩをうまく活用したことによって、という事例は、まだ、僕が見えている範囲に限りますけれども、聞こえ

てきてないという気がします。やはり、人が減ってきている中で、その減った人の生産性をどうカバーしていくのかという部分の使い方もあると思いますし、とはいえ、どこまで伸ばせるのかというと、水産業では、この10年ぐらいで、1人当たりの生産量で1.2～1.3倍にまでしか増えていないので、それを２倍にするのは、おそらく現実的ではないということを思うと、今度は、インカム（収入）を考えた場合に、どう付加価値を付けていくのかというところ、まさに、おっしゃる通りだと思うのですが、そこのところに、うまく使っていくということと、川村先生のお話を聞きながら、サラリーマンよりは自営業の方がＡＩを導入しやすいのかなと、先ほどのお話を聞きながら思っておりましたので、まさに、一次産業や自営業の方は、余った時間を遊びに使える方々なので、うまくＡＩを導入できればなと思って聞いていました。

【川村座長】
　ありがとうございます。

【北海道経済部　大矢次世代社会戦略監】
　先ほどの、付加価値を高める方にＡＩをというお話でいうと、我々も、今、ＡＩ活用について、色々な方々に聞いているのですけれども、ワイン用ぶどうの糖度を測って、糖度の均一なものを採って、ワインを作ったら、すごいものができるのではないかと取り組まれているお話を伺ったことがあります。その例は、ＡＩではなくて、スペクトル解析、光の透過と反射を分析して、糖度の均一なものを判別して、自動でピッキングしてといったことを、北海道大学のスマート農業の野口先生が取り組まれているというお話で、実は、たまたま、その取組に対して、道として補助をさせていただいていることもあって、その動きなどは、我々も追っていきたいと思いますし、そういう前向きなお話も、先ほど先生からありましたけれども、すごく興味がありますし、同じように、人手が足りないところをどうしようかという議論もそうですけれども、やはり、そういう新たなものは、我々も注目していきたいと思っています。

【川村座長】
　本当に、和田先生がおっしゃっているように、自営業の方であれば、空いた時間をもっと有効に使えるとなると、実は、ＡＩやＤＸって、やり方がわかると、すごく導入のインセンティブが高いと思うのです。今、大矢次世代社会戦略監がおっしゃいましたけれど、ＡＩで良い品質のものを作れば、高く売れるというのも、まさに、自営業の方だったら、ダイレクトに自分の収入に繋がってくるので、そういう意味でいうと、うまく事例ができると、北海道の一次産業でＡＩやＤＸの活用は、結構面白いことになるのではないかなと。そういうのであれば、明るい未来に向かったＡＩ・ＤＸになるので、人手は確かに足りないと、少子高齢化だというのもそうなのですが、それは、未来に向かってあまり明るい話題ではないので、

是非、Society5.0 推進計画の中では、そういう、明るい未来に向かって、ＡＩやＤＸが、良い社会を作っていくという雰囲気も少し出せると、良いのかなと思いました。
　ほかに何か追加で、御意見などございますか。

【西野委員】
　今、ＡＩが活用される社会というお話がありましたけれども、もし可能でしたら、今後、次期計画の策定に向けては、徹底的に生成ＡＩを使って、計画策定を考えてみてはどうなのかなと。今後、骨子案や、原案などが出てくるので、徹底的に、例えば、生成ＡＩは、もちろん、データ分析もできますし、色々なアイデアも出してくれますし、さらには、こういった会議の記録をＡＩに読み込ませれば、それを簡単にまとめて、ポイントも示してくれるということで、徹底的にＡＩを使うことによって、どれくらい計画策定の手間を削減できるのかも、ひとつ検証してみてはどうかと思いました。といいますのも、自治体現場では、ものすごく計画策定に、時間と労力とお金をかけているということで、我々こういったデジタル分野では、ＤＸ推進計画を作ろうとか、人口減少でも地方創生の戦略を作ろうといって、様々な部署が色々な計画を１年なり、２年なりをかけて作っているのですが、それを徹底的に生成ＡＩで作ることで、どれだけ時間と労力とコストを削減できるのかを、今回の Society5.0 推進計画をモデルに取り組んでみてはどうなのかなと。データがあるかどうかわからないですが、例えば、5 年前に作った時に、事務局の職員が、これだけの人とこれだけの時間をかけて、これだけの会議を開いて、何百時間かけてと。それを、今回、徹底的にＡＩを使うことによって、例えば、それが 1/3 に減ったということが、数字として、もし、現れてくるのであれば、それをモデルとして、例えば、道庁内の他の部署でも、たくさん計画を作っているので、そこに波及をさせるだとか、我々自治体の中でも、それが参考になるのかなと思います。今、富良野市でも、国で、こども基本法という法律ができて、大綱ができて、道が、子ども計画を作って、それに基づいて、市町村も子ども計画をこの２年間で作らなければいけないということで、今、教育委員会の子ども未来課で策定をしようとしておりますけれども、是非、これを生成ＡＩで作ってみないかと担当に呼びかけました。つまり、普通に作ったら、これだけかかるけれども、生成ＡＩに色々と学習させて、色々とアイデアをもらいながらやると、これだけで済んだよということの、ひとつのモデルを作りたいなと思っております。そうした中で、少しでも市町村が関わっている計画策定の省力化を図れる可能性があるのも、ＡＩの大きな強みではないかと思いますので、もし可能でありましたら、道庁内でも、そうした検討を含めて、策定を進めてはどうかと思います。以上です。

【川村座長】
　考えてみれば、おっしゃるとおりで、Society5.0 の計画を作ろうというのに、ＡＩを使ってない。それは確かにどうなのかなと。ここは率先して、ＡＩを使って計画も考えるべきというのは、そのとおりかなと思いますので、使い方の工夫は、色々あると思うのですけれ

ども、例えば、今日の会議は録画・録音されていると思うのですけれども、この文字起こしは、当然ＡＩでするとして、まあ、色々な方が、色々な感じでしゃべったものを、後で文字を全部読んでまとめるというのも大変なので、ChatGPT などを使って、発言趣旨を、粒度を揃えて整理して、例えば、10 個の意見に集約すると、どういう意見になるのか、といったことをさせるのは、別に生成ＡＩに計画全部を作らせたという話ではなく、まとめ作業をやらせるということだし、最後のところで、例えば、パブコメとか子どもの意見を聞こうといったときに、計画がどういうふうに見えるのかを、多様なところから検討するために、こういうことをやると思うのですけれども、これをやる前に、ChatGPT に、「あなたは、札幌に住む、何歳くらいの子どもです」、「この計画を子ども目線で見たときに、あなたの未来にとって良いものですか？悪いものですか？」というのを「評価してください」というようなことも、ChatGPT にやらせればできますし、やらせたからといって、ChatGPT の丸写しで、計画にしたという話ではなくて。要は、多様に評価するために、ＡＩを使うこともできるので、色々な使い方ができると思う。結局、同じものを作るのに時間を減らすのか、同じ時間を使ってすごくクオリティの高いものを作ることなのか、それが達成できれば、ＡＩを使った価値はあるので、まさに、西野委員がおっしゃるように、Society5.0 の会議が、ＡＩを何も使わずに計画を立てたというのは、確かに違うような気がします。使い方は色々あのあるでしょうけれども、そこは是非、原案を作るときにも、ＡＩを使って時間を減らすというよりは、できれば、同じ時間をかけて、さらに内容の濃いもの、道民の皆様にとって、様々な、あらゆる角度から見たときに、良いものになればいいかなと確かに思いました。

【乗木委員】

せっかくなので、同じ自治体という立場からお話すると、計画の今の話って、確かに西野委員がおっしゃるとおりだなと思っています。それと同時に、よく行政の効率化を進めようという中で、システム化して色々な作業をしましょうというときに、BPR（業務改革：Business Process Re-engineering）が進まないというところで、そもそも、その作業って必要なの？という話がよく議論になったりします。今の話も同じで、結局、確かに色々な部署で色々な計画を作るのですけれども、そもそも、その計画は必要なのかについて、結構思うことがあって、この動きは、結構国からも、色々なところから、個別にやるのってどうなの？という話は議論があるので、そのうち改善されてくるのだろうとは思いつつ、この両面もあるだろうなと思っています。

少し話は変わりますが、今回は、計画の方向性の中で、ＡＩなり何なりを活用していきます。そして、その基盤を整備しますと。また、先ほど話題になった一次産業などで、その導入が進むと、もっともっとニーズが高くなってくるのだろうと思います。どうしても、この辺を進めるということになると、例えば、ＡＩ用のデータセンターを誘致するといったときに、お金なり、何なりという、今の日本の仕組みでいくと、自治体の力の差が、どうしても出てきます。例えば、苫小牧市に誘致しようといっているものを、当別町に持ってこいとい

うのは不可能でしょうし、今朝も結構ニュースで出ていましたけれど、北海道日本ハムファイターズの二軍の誘致について、６市しか候補地が出ていないですけれど、あの６市以外は多分受け入れできないと思います。今の自治体の財政状況からいくと、土地はあっても、使える場所があっても、それ以外の理由でできない。これが、今のＡＩ市場だとか、そういったデジタル系の市場においても、おそらく同じことが起きていて、結局は、その中央や資本の多いところに集中してしまうと。結果として、地方、地域の活性化に繋がるかというと、さて、どうだろうということが、直接的には考えたりもします。色々と物事を進めて進化していって、活用の幅も広げていって、その恩恵が、どこに住んでいても幸せに暮らせるというのが目的でありながら、結果的に、どうなってくるのだろうかというのは、若干危惧する部分ではあるし、今まで日本がたどってきた歴史というのは、おそらく、そういった流れがあるのだろうと思っているので、そこが少し、せっかく北海道で計画作るのであれば、北海道においては、こういう特性なのだといったところが、一つ書き込まれてくると、あるいは、その議論の中に、そういった視点が入ると良いのかなと感じながら聞いていました。

ちなみに、違う話になりますが、当別町で今年スマート農業という触りで事業をやろうとしているのですが、当別町は、花き栽培が有名です。花きは、ハイリスク・ハイリターンな作物で、出荷時期などの調整がすごく難しくて、花き農家さんのノウハウというよりは、収穫する方のセンスのようなものなのですが、これが継承されないと、その品質の花きを出荷できないということから、何をするかというと、その方々が花を収穫しているときのノウハウを撮ろう。それをデジタル化して貯めておいて、誰が採ってもベストな状態の収穫ができるようにという、そんな実証を今回やろうとしています。この技術のもとは、イスラエルです。そういったところを、細かく、細かく、色々なところで実証していって、積み上げていって、そのとき、その状況をフィードバックしていって、他で使えるところに広げていくという動きというのは、おそらく、各地で進めているので、やはり、そういった事例を束ねていくというのは必要なのだろうと思ったりもしました。

その関係で、先ほど、ＡＩの使い方で、後ろ向きなのか、前向きなのかという話もありましたけれども、色々な使い方があると思うのです。今、一部の作業・処理の中で、ＡＩの活用が進んでいたとか、あるいは、センサー技術だとか、色々な技術を組み合わせてやることになると思うのですけれども、とにかく、今までの一次産業を楽にするという方向と、もう一つは、違う一次産業を生み出すという工夫や努力が、おそらく、北海道には必要なのだろうと。広大な土地があるから、その土地を使って、良い作物を生産することから、今やもう、使う肥料というのも、本当に手に入るのかどうかわからない状況になってきているので、そういったものに頼らなくても、きちんと自立できるような生産体系を生む、その技術を確立するために、この広大な土地を使うというのは、北海道としてあり得るのかなと考えていたりして、また、この手の分野の話は、色々なところで議論されているので、何かそういったノウハウというか、知識を束ねられるような動きがあるといいなと思います。以上です。

【川村座長】

本当にそこが大事だと私も思っていて、例えば、テクノロジーを導入して儲かるのであれば、みんな、ほっといてもやっていくはず。そのときに、こういうものを使ってこういう儲かり方があることが分からないから、多分、普及って進まないのではないか。そう考えると、ブドウの例も先ほどありましたけど、そういうものを相互に情報として知っていく中で、新しい付加価値を生むと分かれば、特に若い人はどんどんやっていくと思うので、そう思わない人にやらせることはできない。馬を水辺に連れていくことはできるけど、無理やり飲ますことはできないのと一緒。馬を水辺に連れていくことのＡＩ版をやっていくのも、この計画の中では確かに大事なことかなと思います。

ほかに、計画に関連してでもそうじゃなくても何かおっしゃりたいことがあれば。

【入澤委員】

ＫＰＩを見ていたんですけども、一つは、ＩＴ人材が２万 5000 人から３万 5000 人この５年間で１万人です。これが未達成で、今後の５年間そこに対してどういうＫＰＩを立てるかはあるのですけど、今ちょっと起きていること、ＩＴ企業の従業員そんなに増えていないです。なぜなら、ＩＴの需要が減っているわけではなくて、企業の中に、内製化するＩＴ人材が増えている、エンドユーザーの中に。

やっぱりＤＸを進めるためには内製化が重要というのが、僕もずっと言っているけど、いろんな企業が自分たちで開発チームを持ち始めるようになって、ＩＴ企業の方の人員を数えても、ＩＴ人材は増えていない、そこも全部含めて数えると結構増えているとは思う。ここの取り方は難しいと思うので、どうＫＰＩを設定するのかは考えたほうがいいと思いました。

あと教育の現場、これも暮らしの所ですけど、多分これ作った時にちょうどＧＩＧＡスクールが始まるところだったと思う。この５年間、うちの子供を見ていると本当にすごいなと思う。プレゼン資料とかで授業のプレゼン作っちゃう。子供でもここまでやれると思うと、デジタル教育はこの５年間で進んだと思っていますので、この次の 5 年間そこをどう進めていくのか、教育委員会さんの意見とか聞いてみたいと思います。

あと、ＫＰＩのもう１つ、デジ田の活用、これ自治体さんの、前々回に、80 か 90 ぐらいの市町村で 178 件のデジ田が北海道でも採択されていますと、すごいなと思った。めちゃくちゃ浸透している、デジタルが。これ１つのＫＰＩというか達成したことじゃないかと。５年後もデジ田という制度があるか分からないですが、今 80～90 だったのが、179 になるとのが理想なので、そういう１つの目標、ＫＰＩもありなのかなと思います。

最後に、テクノロジーの話ですが、テスラがロボットタクシーを作っています。これすごい破壊力です、運転席のないロボタクシーがもし本当に世に出たら、ハンドルがない車、３万ドルです。その車は、自分で充電ステーションに行って、携帯みたく非接触で車が充電できる。そうすると町中を勝手に走って、いつの間にかそこに戻って充電する仕組みになれば

駐車場が要らなくなる。３万ドル、日本円で 450 万ぐらい、安いです。そうすると知恵のある人は自分で所有して、普段走らせといて、白タクみたいなこと、アメリカではウーバーで合法なので、そうすると、利回り商品になる。それが何台も何台も増えていくと、その辺にあるロボットタクシー捕まえればという行動変容に変わるので、自分で車を持たなくなる。自家用車が要らなくなると、日本の車絶対売れなくなる。このロボットタクシーが広まれば、日本の車産業終わるぐらいに見えるけど、それ、当然、北海道でも起こり得るかなと思うんですが、ただ、やっぱ雪があるので北海道はこれが起きない。絶対にとは言えませんけども、いろんな自動運転の会社さんとかいろいろ聞いても雪は後回しみたいな感じになっています。雪がないところでまずやると。だけど、そういう世の中が必ず来ると思うので、それを北海道としてどうするかは、何か考えてもいいのかなって思っています。

多分、こう未来図、テクノロジーが進化して未来が変わっていくところで、バックキャストで今どうするかを考えるのがこの計画だと思うので、それこそロボタクシーはあれですけど、ドローンみたいな空飛ぶ車だったら雪の影響受けないとかありますから、そういうのもあるのかなと。せっかくなのでそういう突飛なことも考えていけたらいいなと思って、頻度というのはあれですが。

【川村座長】

自動運転に関して、車は存在時間の５％ぐらいしか使われてないから 95%は駐車場です。すごい無駄。確かに、大学行っても駐車場に車ただ止まっているだけ。稼働率を例えば 50%に上げるだけで世の中の車こんなに要らなくなるし、入澤さんおっしゃるとおり、車が自動運転になると、町づくりもめちゃくちゃ変わると思う。なぜなら、タクシーで歩いて三分か五分ぐらいのところに止まれば、別にいいじゃないかと考えると、道路だってこんなにいらなくなると思う。除雪の問題も、滑るつるつるの路面を、自動制御でうまく走らせるのは多分そんなに難しくないと思う。問題は、雪が深くて埋まったみたいなところを、多分、制御で対処するのは、どうにもならないケースはあり得るから、多分雪国で自動運転の車を走らせるときに、そこだと思う。これも、今の話と一緒で、家の目の前までタクシーが来ることを前提に整備しようとすると、雪降ったときどうするとなるけど、タクシーが止まって５分ぐらいは歩くことを許可すると、ここまで除雪しなくてもいい。逆に、自動運転が通る道路だけは、今の３倍の除雪をすることで対処すると、家から５分は歩きなさいと、そこは除雪そんなに頻繁に入らない、歩ければいいぐらいの考え方をすると、自動運転も雪国でもしかしたらできるかもしれないと、あながちない未来ではないかと思う。そうなると、物流も変わるし、コンビニがこんなにあるけれど、自動運転の車が家まで配達してくれますとか、近くに持ってきてくれますとなったら、もっとネットで注文して、パッとピックアップするみたいな使い方もやりやすくなるとか、いろいろ変わるのは確かにあり得るし、その中間にヒューマノイドが入ってくれば、ラストワンマイルを、ヒューマノイドが担うこともできるのかなと。

確かに、そういう未来は夢みたいだけど、ChatGPT を考えると、20 年先かというともしかしたら 10 年後には、何か近いことはあり得るかなと思います。ちょっと雑談みたくなりました。

ほかに何かありますでしょうか。

【和田委員】

聞きたいんですけど、ラピダスとかで、千歳で賑わっているじゃないですか、工場とか。どうなんですか実際は。

【小松川委員】

千歳の話ですか。ラピダスは期待値です。期待値で人が集まっているのが正直なところで、人材育成の観点でいくと、どういう形での人が本当に必要かは、まだ試行錯誤ですし、ラピダスさんの話を聞いても試行錯誤です。ただ、キーワードとして出てくるのは、数理データサイエンス。ＡＩ、そういったことができる人材はラピダスでも必要だって言われているので、そこはすごく重要なのだろうと思う。ラピダスさん自体がまだそんなに人を取ってないです。ですからこれからです。ただもうとにかく人がたくさんいますので、これから期待値なんでしょう。

せっかくなので、人材育成で、先ほど入澤さんの話も、大変素敵な話があったので、少し補足だけ。今日お話聞いていて、人材育成は、短期的視点と中長期的視点がすごく重要だっていつもワーキングなんかでも出た議論だと思うんです。短期的な視点って今の技術にどうアップデートできるかでいくと、入澤さんが話していただいたリスキリングだとか、あと川村先生が御指摘いただいたインセンティブすごい重要です。そういうことを本当に考えていくのが、次の計画のときでも重要なのだろうと思いました。

あと、中長期的な視点は、和田先生が一言おっしゃっていましたけども、未来の子供たちがどうなるかを考えるのも、前回の時からもずっと議論出ているところで、重要だと思う。私、中長期的なところは、いろいろ皆さん御意見が出るんですけど、ＫＰＩ含めてどうするって話になると、なかなか難しい。もう一つは、制度上、北海道でいくと、子供たちの学びをしっかりやるとこはどこか、北海道教育委員会って話になって、ちょっと守備範囲が違う感じがします。ここでの議論とはまた違った少し聖域的なところがあって、あまり議論にならなかったんじゃないかなって思うんです。

一方、入澤さんの先ほどのお子様の話って、すごく重要で、実は、今、初等中等の教育課程でこの５年間ですごく変わっている。皆さんの認識だと教育課程は変わらないって認識ありますよね。いつまで経っても算数は算数だし、理科は理科だし、情報が一気にここ何年かで本当に初等中等に入ってきて、実は今度中学校の場合、中学校の技術課程がかなり大きく変わってきて、ＩｏＴも情報もそれから農業のＩＴ化の話、ＧＸの話も入ってくるところで今いろいろ検討しているんです。そうすると、義務教育のところから、本当に子供たちが、

今日ここで議論している話に触れる機会を作っていくのが、次の学習指導要領から、変わっていく、そういう議論を文科省がしている。

そうなってくると、中長期的な議論なんだけども、本当に子供たちの教育をどうするのって議論、全体的にしてかないと、特に北海道は広域分散だから、義務教育って、どの自治体だってあるわけです。どんな自治体だって小学生いるし中学生いるわけだから、そういう子たちが本当にちゃんと教育ができていく世界を、ぜひ北海道としてしっかり考えていただきたいと思うんです。

多分、札幌とかそういう地域は、環境はたくさん恵まれているけれども、地方に行けば地方に行くほど、日頃からそういうことに触れる機会もないし、先生方だってよくわかんないしみたいな世界がたくさんある中で、どうやってこういう今日議論しているような話を、本当に地域の子供たちが触れる環境作ってあげるか、それが５年後 10 年後に、よく言うんですけど、川村先生のＡＩ道場に行っていただけるような枠組みを作っていただくことがすごく重要って思って聞いていました。

ぜひ、次の計画では、北海道全体の中長期的な検討が、短期的なところの入澤さんのところの企業に繋がるような、そういった計画になるとすごくいいなって思って聞いていました。すいません私もざっぱくな感想でした。

【川村座長】

ありがとうございます。

私も雑談的にコメントすると、教育はすごい大事で、息の長い変わらないものってイメージは確かにあるけど、何か変えたら、大体、15、6 年ぐらいで結果が出るわけです。その子供が大人になるまでの間の話と考えるとＡＩとかＤＸが登場して教育がどうあるべきかみたいな話、ChatGPT の登場って世界がこんだけ変わるっていうのと同時に、教育も変わっていかなきゃいけないってすごく思います。いいかどうかは別にして、個人的には、よく教科書的スキルみたいなものが、果たして、人がこの先こうやっていかなきゃいけないことかっていうと、最近いろんなところで言っていますけど、北大の入試を ChatGPT に受けさせたら、10 数秒で 100 点満点なわけです。

一方で答えがないことを議論して考える、海外だとディベートと言ったりしますけど、それを考える力ってますます問われるんじゃないかと思う。そう考えたときに、今、小松川先生いろいろおっしゃいましたけど、例えば地域課題とか自分の住んでいる町の何かをこれどうしようって言っても答えがないけど、みんな身近なことだから、考えることできる。学校にエアコン付けてくださいみたいなことを言ったら、１億円もかかるから、何とかかんとかとどこかの首長さんが答えたという話が載っていた気がしますけど、確かに、小学校でエアコンがないと大変だ、エアコン付けてくださいと言うのは簡単だけど、お金って立場で見たときにそれはどう見えるのか。どっちが悪いとかじゃなくて、答えがない中で、でも何か考えて決めていかなきゃいけない、まさにＡＩ時代、そういうことすごい大事だし、それを

考えるのに、世界的な、例えば、イスラエルとガザの戦争みたいなことをテーマに考えようみたいな話もあるんだけど、イスラエルの人がどう思っているか、ガザの人はどう思っているのかわかんない中で考えていたってリアリティがないから。それ身近な町で起こっていることを題材に考えると多分正解のない世の中の問いっていっぱいあって、それを深掘りするためにＡＩを使ったとしても答えはないわけです。

だから、本当に学びって、ＡＩの登場によって、何を学ぶべきかは、大きく変わってくるし、それってSociety5.0にも、凄く、将来的には関わってくるので、今回の計画でどこまで入れられるのかとかは、確かにありますけれども、何となくそういうニュアンスも入るといいのかな、子供たちに読んでもらうことを考えると、それが実際の教育課程に入るかどうかじゃなくても、そういう学びが大事だというメッセージは、この中で出していくのは確かに大事かなと思いました。

【小松川委員】

川村先生の御指摘のとおりだと思うのは、子供達がそう思ってもらうために、必要だと思う。今日こういった議論、いかに子供たちに伝えていくか。その一番ポイントになるのは、先生です。中学校、高校の先生方が、今日みたいな議論をちゃんと理解してもらう場をどう作っていくか、これ多分教育委員会だけで閉じると、教育委員会の人たちも、実は学校の先生だったりするし、そういう人たちの中だけで議論していると、一向に今の学習指導要領の中だけの議論で終わっちゃうし、最後は、入試はどうなんだって、先ほど北大の入試の話のとおりで、もう北大の入試なんて（ChatGPTを使うと）100点取れるのに、その100点を取るために頑張って、学校では教育しちゃうという、そこの矛盾を、地域全体、北海道全体で、今そういう時代じゃないことを、高校の先生とか、中学校の先生に例えばオンライン使ってうまく共有する場を作るとか、北海道教育委員会もうまく連携して動くと、大分雰囲気違うという気がする。せっかくこういった議論しているのにそれが現場に降りていかない残念感がすごくあるので、そういうことをうまく、北海道としてもやっていただけるといいかと改めて感じました。

【川村座長】

最近、高校の先生とかに話聞きたいとか、講演して欲しいとか頼まれたりすることもあって去年なんかも話したんですけど、今みたいな話をするわけです。大事なのって、教科書的な答えある問題解いて、ＡＩができるからそうじゃないところが大事になりますよと。でも、やっぱり、しらっとするわけです。これなぜかというと、言い方悪いんですが、指導要領があって教科書があって、例えば算数の先生は、算数の世界の神様なわけです。全部の答えを知っているのは先生だから、これ全知全能なわけです。全知全能って神様の定義じゃないですか。となったときに、いやいや、地域のわからない課題を一緒に考えよう。先生も答えがわからないって、神様じゃなくて人じゃないですか、答えがわからない。何だ先生も答えが

わからないのかみたいな、となったときに、自分が今まで神様みたいな構図で成り立っていた講義・授業というのが、人として自分もわからないよ、一緒に考えようってことに降りていけるかどうかを考えると、これって本当、もうコペルニクス的展開みたいなことを先生が受け入れないとそうなれないから、なかなか、何かそういう、自分も人なんだっていう世界に変わることが難しいのは根本にあると思う。ただ、おっしゃるように、さっきのＡＩの話で僕も、大学で試験監督、入試の試験監督やって 12 年間の成果を発揮するために来た受験生に向かってスマホは電源切ってカバンにしまってくださいと。鉛筆と消しゴムだけですって言って受験して、２時間後に回答を回収すると、回答率そもそもなんか白紙回答もいっぱいある。書いてあったとしても採点したら、別に半分も取れるかどうかがほとんどってなったときに、でも彼らのカバンにしまったスマホに聞けば 100 点満点なんだよなっていう構図です。これがまさに今のテクノロジーの講座で、いい悪いではなくて、こういう構造になっているから、そうなったときにさっきの子供たちのためにって話に戻りますけど、今の子供たち、これが当たり前で 20 年間この先育っていく子供達が、それがなかった時代の大人がスマホでレポートやるお前はもう馬鹿かと。自分の頭で考えろと言ったって世界が違うわけです。それは、いいとか悪いとかいう話じゃなくてもう前提条件がそれだけ変わっている中での Society5.0 というのは、間違いなく 10 年経ったら、それが当たり前の 10 歳の子供が 20 歳になって社会参画するわけだから。そう考えるともう本当に何かすることは、我々も答えはわからないけど、議論していって、それぐらいのドラスティックな変化がある中での Society5.0 と考えないと、何となく古い人が作った、こんなのナンセンスだよねって、10 年後の 20 歳が思うようになったら意味がないかなとは確かに思います。その辺は、方向性に反映させるのは難しいにしても問題意識としては少なくもここにいる方々は、それを意識した上で、我々なりに頭決めて、いいものを作っていく、残していくことを、一緒にやっていければいいのかなと思いました。多岐に渡っていろんな話も出ましたが、皆様方とこういうディスカッションできるのは非常に有意義でしたし、この一部でも、計画の中に今少し取り入れられるところがあれば入れていただければと思います。

こういうことで、やはりいろんな方向性に関する議論も出尽くしたかなと思いますので、これを、参考としながら、いろいろ考えていただければと思います。それでは、まとめを振ってしまってあれですけど、大矢次世代社会戦略監から一言よろしくお願いします。

【北海道経済部　大矢次世代社会戦略監】

今、川村座長から全ては入らないかもしれないって話を御了解いただいたと思いますので、ただあの、すごく僕思ったのが本当に突然亡くなってしまわれた岩見沢市の黄瀬さんが、作ったときは一番楽しかったし、一番議論できたという話を、１年前におっしゃっていて、そこはずっと気になっていたんです。定例の会議でいくと、事務局が進捗状況を報告してみたいなことになっていて、それが本当ではないなと思っていたのが、今日は、我々、道庁職員が一番刺激を受けられたし、すごくいい、本当の意味での会議になったのかなと思ってい

ます。やっぱりいろいろ、私、こういうのを議論ができるのが一番我々も嬉しいんで、本当にどこまで次のときに、入れられるかわからないですが、またそれに対して、いろいろ言っていただいて、子供たちに見せてもという話も一つのキーワードだと思いますので、これが子供たちに見てもらえるかと、単純にその、正確にふりがな振ってパブコメして、何か反応がありました、なかったです、みたいなことだけじゃなくて、本当にそのメッセージとして何を伝えたいかみたいなことを、考えた上で作成をしていきたいと思いますので、引き続き、今年はあと３回開催させていただきます、最後までお付き合いいただければと思います。本日はどうもありがとうございました。

【川村座長】
　それでは事務局に進行をお返ししたいと思います。

【北海道経済部ＡＩ・ＤＸ推進局　石川局長】
　皆さん、長時間にわたりまして大変貴重な御意見御助言ありがとうございました。
　限られた時間の中でしたので、言い足りない部分あろうかと思いますが、また何かありましたら適宜オブザーバーの方も含めて、何かあれば事務局の方に、御連絡いただければと思います。
　また今後当面の予定ですが、委員の皆様から頂きました御意見を参考に、先ほど事務局の方からも申し上げましたが、事務局側で計画骨子案のたたき台を作らせていただきます。７月下旬をめどに、皆さんに意見照会させていただいて、そこで頂いた御意見を反映した形で、骨子案という形で、８月下旬、第３回目の推進会議の方で、御議論いただきたいと思いますので、本当に今日頂いた意見我々も参考になりましたので、また忌憚のない意見、７月下旬にまた皆さんに御意見照会させていただきますので、頂ければなと思っております。
　それではこれをもちまして、令和７年度第２回の北海道 Society5.0 推進会議終了いたします。お忙しい中御出席ありがとうございました。

　以上